

日本語学習者の言語行動に対する教師と非教師の受け止め方

石 崎 晶 子

(1998.12.5 発表)

1 はじめに

近年、語学教育では、伝達力の養成に重きがおかれるようになった。効果的な伝達には、ことばの意味が伝わるというだけでなく、話し手の感情、価値観を的確に表現する必要がある。また同時に、聞き手が理解に要する負担が少ないということも、重要な要素になる。

母語話者の教師は、学習者のことばの最初の聞き手として、学習者を指導することになるが、学習者のことばに慣れた教師は、一般の母語話者と感覚のズレがあると言われる。ズレには、2つの方向性が考えられる。

- ① 教師は、教室で取り上げる言語形式に目が向きがちであるため、言語形式に対する評価が厳しくなる。(Hadden 1991, Okumura 1995, 趙 1991)
- ② 教師は、学習者の話し方に慣れているため、一般の母語話者より理解が容易である。

本研究では、中上級の学習者と母語話者のインタビューを撮影したビデオを刺激として、母語話者の教師と非教師の評価にどのような差があるかを探る。

2 実験方法

刺激 日本語学習者（オーストラリア人の中上級レベルの女子大学生、7名）と母語話者（年長の男性、1名）とのインタビューで、各1分半、学習について語っているビデオを刺激とした。

評価者 評価を行ったのは、教師28名、非教師24名である。教師は平均年齢は41.1歳、非教師は平均年齢は39.0歳で、全員女性である。

評価方法 各インタビューに24項目の質問に5段階で答えるという形で、1人の評価者が7回評価を行った。

3 分析

3-1 因子分析

- 1) 評価の視点は、一面的なものか多面的なものか、2) どのような視点から

評価を行っているか、3) 教師と非教師とでは評価の視点は異なるか、を見るために、因子分析を行った。

表1は因子分析の結果を示したものである。固有値、累積寄与率、解釈のしやすさから教師、非教師ともに3因子構造を採用した。因子構造に教師と非教師は見られなかった。因子負荷量の高い項目から第1因子は「言語能力」、2因子は「社会性」、第3因子は「非言語伝達力」と解釈した。

3-2 教師と非教師の比較

教師と非教師の比較を行うため、1つにまとめて因子分析を行って各因子に属する項目を決定し、合成得点を作り、因子ごとにt検定を行った。

t検定の結果、3因子とも有意差は見られなかった。差がでなかった理由として、以下のことが考えられる。1) 1 コミュニケーションに重点を置く教師が多かったこと。(授業で重視すること: 学生が言いたいことを話す 28名、学生が自由に話す 17名) 2) 2 教師のほうが評価が厳しいとした先行研究では、非教師はいずれも学生であるが、今回のデータ中、非教師24名中6名が学生(平均23.2歳)、18名が社会人(平均44.3歳)となっており、年齢、社

表1 教師と非教師のバリマックス回転後の因子行列

教師					非教師				
	第1因子	第2因子	第3因子	共通性		第1因子	第2因子	第3因子	共通性
Q01 わかりやすい	0.74	0.23	0.03	0.60	Q01	0.80	0.29	0.08	0.73
Q02 語彙豊富	0.73	0.18	0.06	0.56	Q02	0.76	0.04	0.21	0.63
*Q03 語彙誤り	0.71	0.06	0.05	0.52	*Q03	0.56	0.34	0.19	0.47
*Q04 文法誤り	0.73	0.17	0.08	0.57	*Q04	0.68	0.32	0.21	0.60
Q05 発音	0.55	0.45	0.13	0.52	Q05	0.66	0.37	0.16	0.59
Q06 流暢	0.66	0.32	0.11	0.55	Q06	0.71	0.26	0.23	0.61
*Q07 意味不明	0.75	0.19	0.05	0.60	*Q07	0.78	0.23	0.12	0.68
Q08 応答的確	0.75	0.15	0.05	0.59	Q08	0.66	0.34	0.06	0.56
*Q09 内容不足	0.61	0.19	0.11	0.42	*Q09	0.66	0.12	0.02	0.44
Q13 知的	0.34	0.67	0.18	0.60	Q13	0.41	0.50	0.25	0.49
Q14 身振り意味	0.12	0.14	0.84	0.74	Q14	0.16	0.03	0.80	0.67
Q15 身振り感情	-0.01	0.11	0.84	0.72	Q15	0.07	0.06	0.86	0.74
Q16 話してみたい	0.36	0.50	0.32	0.49	Q16	0.55	0.44	0.24	0.55
Q17 折り目正しい	0.33	0.69	0.06	0.59	Q17	0.17	0.68	0.22	0.54
*Q18 態度嫌	0.37	0.69	0.19	0.65	*Q18	0.35	0.74	0.02	0.67
*Q19 ことば嫌	0.44	0.68	0.17	0.68	*Q19	0.44	0.61	0.05	0.57
*Q20 ことば不適切	0.51	0.43	0.11	0.47	*Q20	0.44	0.47	0.06	0.41
*Q21 疲れる	0.61	0.31	0.25	0.53	*Q21	0.71	0.39	0.08	0.66
Q22 表情	0.15	0.30	0.54	0.40	Q22	0.23	0.22	0.70	0.59
Q23 声	0.12	0.58	0.19	0.39	Q23	0.25	0.68	0.15	0.55
Q24 女らしい	-0.03	0.58	0.05	0.34	Q24	0.11	0.68	-0.04	0.47
固有値	8.40	1.97	1.16		固有値	9.17	1.74	1.33	
寄与率	40.0	9.4	5.5		寄与率	43.7	8.3	6.3	
累積寄与率	40.0	49.4	54.9		累積寄与率	43.7	52.0	58.3	

*は逆転項目

因子負荷量 ≥ 0.4 のとき有意

第1因子：言語能力、第2因子：社会性、第3因子：非言語伝達力

会経験から差が出る可能性があること。

そこで、学生、社会人、教師の3群に分けて、分散分析を行ったところ、各群の差は大きくなったが、有意ではなかった。

質問ごとに各群の得点を見ていくと、2つのパターンが観察される。<図1>

① 社会人<学生・教師

社会人の評価が最も厳しく、学生と教師の評価がほぼ等しいもの。

わかりやすい、意味不明、流暢、話したい、疲れる、控え目、身振りが意味を伝える、折り目正しい、態度が癩に障る } 現在の能力の全体的評価

② 教師<社会人<学生

教師、社会人、学生の順に評価が厳しいもの。

語彙が豊富、文法の誤り、発音、→ 教育対象となる、個別
 応答的確 } 教師の職業意識を反映
 内容が物足りない、積極的 → 努力で補えるもの
 知的、声の感じがよい、女らしい

③ その他 学生・教師<社会人 場にそぐわない言葉遣い

学生<社会人<教師 表情が役立つ、緊張している

学生≒社会人≒教師 ことばが癩に障る、語彙の誤り、身振りが気持ちを伝える

このように、ほとんどの項目で、学生の評価が甘くなっている。これは、同年代の同性ということで、自分が同じ立場に立ったときに自分がどの程度できるかという観点から考え、学習者に共感しやすいためと思われる。

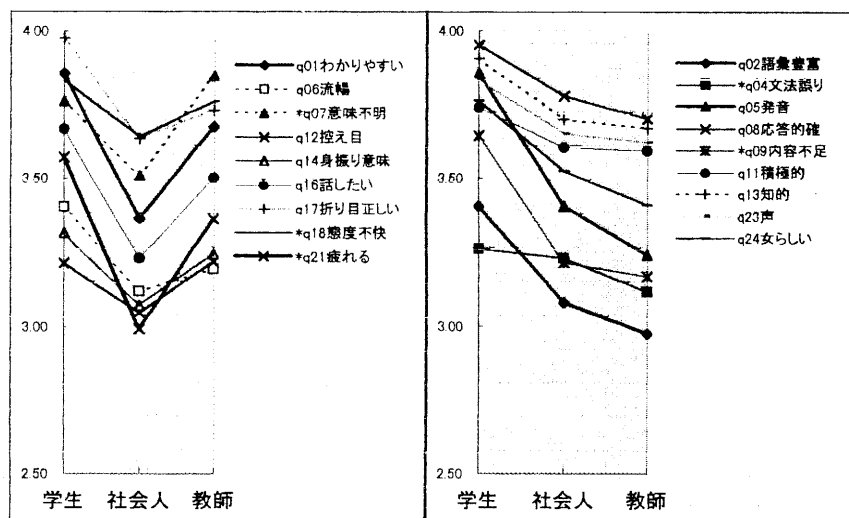


図1 質問項目ごとの得点パターン

そこで、教師の特殊性を反映しやすい項目として「わかりやすさ」「文法の誤り」「語彙が豊富」「発音がいい」の4項目を取り上げ教師、学生、社会人3群による分散分析を行った。その結果、表2に示すように、「わかりやすさ」「語彙が豊富」「発音がいい」の3項目に5%の有意水準で差が認められ、下位検定の結果、以下のグループ間に差が認められた。

わかりやすい 社会人<学生、社会人<教師

語彙量 教師 <学生

発音 社会人<学生、教師 <学生、

「わかりやすい」の評価では、教師、学生の評価が社会人より甘くなっている。これは、教師は、学習者の言語に対する慣れから理解するのに負担が少なかったこと、学生は学習者に対する共感を持ちやすかったためと思われる。

「文法の誤り」の評価に差が出なかったのは、刺激とした対話に含まれていた誤りが比較的少なく、伝達上重大な誤りではなかったこと、複雑な文を構成しようとして誤りが増えているケースがあることから、評価に差が出にくかったものと思われる。

「語彙が豊富」で教師の評価が厳しくなったのは、話の内容に比較して平易な語彙の使用が多いこと、つまり「教授法」を「教え方の科目」のように言い換えるコミュニケーション・ストラテジーの使用などが影響し、会話の内容や学習レベルから期待される語彙レベルとのギャップを感じたためと思われる。

「発音」に関しては、学生の評価が社会人、教師より有意に高かった。学習者の発音の特徴として、特殊音節の誤り、破裂音・破擦音が強いなどが挙げられる。学生は自分の外国語学習の経験をもとに理解に支障が少なかったことから評価が甘くなり、社会人は聞きなれないことによる違和感から、教師は標準からの逸脱を認知したことから評価が厳しくなったものと考えられる。

表2 質問別分散分析の結果

	学生	社会人	教師	F 値 (df)	p 値	
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)			
わかりやすい	3.86 (0.97)	3.37 (1.07)	3.67 (0.95)	5.39 (2, 361)	0.00	**
文法の誤りが多い	3.26 (0.95)	3.23 (1.19)	3.12 (1.12)	0.52 (2, 361)	0.59	n.s.
語彙が豊富	3.40 (0.66)	3.08 (0.96)	2.97 (0.95)	3.76 (2, 358)	0.02	*
発音がいい	3.86 (0.86)	3.40 (1.03)	3.24 (0.96)	7.03 (2, 361)	0.00	**

** p<0.01, * p<0.05, n.s. p≥0.05

4 まとめと今後の課題

以上から、以下のことが示唆された。1) 教師、非教師とも評価の視点に大きな差はない、2) 評価の視点として、言語能力、社会性、非言語伝達力の3つが伺われた、3) 言語能力、社会性、非言語伝達力という大きい枠組みで見たとき、教師-非教師、あるいは教師-社会人-学生の間に評価の差は見られない、4) 教師と非教師という差以上に、年齢（社会的立場）が大きく作用している可能性が示唆された、5) 項目別に見た時、教師の慣れが影響しやすい項目（わかりやすさ、つかれる）ではやや甘く、教師の専門性が反映しやすい項目（語彙量、発音）ではやや厳しくなる傾向が見られた。

今回の実験では被験者数がアンバランスであるため、3群のデータ数を揃え、分析する必要がある。

（統計処理には、統計ソフト SPSS を使用した。）

【謝辞】 今回の実験で刺激として使用したビデオは、モナシュ大学で 1995 年から 1996 年にかけて撮影されたものをお借りしたものです。貴重な資料をこころよくお貸しくださったヘレン・マリオット先生に心より感謝いたします。

【参考文献】

- Albrechtsen, D., Henriksen, B. and Færch, C. (1980) Native speaker reactions to learners' spoken interlanguage, *Language Learning*, Vol.30:2, pp.365-396
- Gynan, S.N. (1984) Attitudes toward interlanguage: What is the object of study? , *The Modern Language Journal*, 68, pp.315-321
- Hadden, B.L. (1991) Teacher and Nonteacher Perceptions of Second-Language Communication, *Language Learning*, Vol.41:1, pp.1-24
- Hughes, A. and Lascaratou, C. (1982) Competing criteria for error gravity, *ELT Journal*, Vol.36:3, pp.175-182
- Okumura, Akiko (1995) Teachers' and Nonteachers' Perception of Elementary Learners' Spoken Japanese, *The Modern Language Journal*, 79, pp.29-40
- 趙南星 (1991) 「韓国人の日本語学習者の誤りの評価 — 日本語話者と韓国語話者による誤りの重み付け — 」『日本語と日本文学』15 筑波大学・国語国文学会, pp.19-30

（お茶の水女子大学大学院比較文化学専攻）